構文選択と焦点化
Syntactic Selection and Focalization

本多 明子 †
Akiko Honda
† 神戸女子大学
Kobe Women's University
a-honda@yg.kobe-wu.ac.jp

Abstract

The aim of this paper is to examine how young children select constructions-form and meaning (function) pairings-from the Usage-based Construction Grammar point of view. In this paper, we show that the English Caused-Motion Construction (CMC) and the Verb-Particle Construction (VPC), which are formally and semantically similar, are used as distinct constructions in the speech of young children in the early stages of language acquisition from the CHILDES (the Child Language Data Exchange System) database. When young children encode a change in position involving things to put on (or take off) and body parts, they select not CMCs but VPCs. We show that focalization and empirical bases are involved in the selection of these two constructions.

Keywords — Caused-Motion Construction, Verb-Particle Construction, Syntactic Selection, Focalization, Language Acquisition

1. はじめに

英語には位置変化を表す使役構文として, (1) に見る Caused-Motion Construction （使役移動構文，以後，本稿では, CMC と記す）と(2)に見る Verb-Particle Construction（動詞・不変化詞構文，以後 VPC）と呼ばれる構文が存在する.

(1) He put his glasses on. (VPC)
(2) He put his glasses on the desk. (CMC)

ここでは，形式的に VPC を(3)のように，CMC を(4)のように示す.

(3) [NP V NP P]
(4) [NP V NP PP]

NP は Noun Phrase(名詞句), V は Verb (動詞), P は Particle (不変化詞), PP は Prepositional Phrase (前置詞句) を表している. V に前置する NP が主語として，V に後置する NP が目的語としての役割を担う. 不変化詞 P と前置詞句 PP は共に目的語 NP の最終的な結果を表す. Goldberg (2016)は, 認知言語学の用法基盤理論である構文文法論 (Construction Grammar)の立場から，構文間の関係を捉える継承リンク(Inheritance link)という考えに基づき (Goldberg (1995), (2006))，VPC は CMC から継承された構文であると論じている．Goldberg は，この結び付きにより，VPC と CMC が形式的，意味的に類似している点だけでなく，なぜ VPC が構文全体の意味として使役の意味を持ち得るのかについても説明できると述べている.

言語獲得の観点から見てみると，VPC と CMC は，成人だけでなく，幼児の発話においても頻繁に見られ，しかも幼児においても, 形式的, 意味的に類似するこの二つの構文は区別して使用されている．子どもの発話データベース CHILDES から VPC と CMC を抽出し，両者の使い分けにおいてどのような特徴が見られるかを調べた結果, 特に顕著なのは, 身体部位と身に着けるモノとの位置変化を言語化する場合には, CMC ではなく，必ず VPC が選択されるということである．子どもはどのようにしてこれらの構文を使い分けているのだろうか. 本論文では，この点について，用法基盤理論，構文文法の観点から，CMC と VPC が持つ構文特性だけでなく，身体を通しての一つひとつの経験が両構文の選択と使用の重要な基盤を成していることを示す.

本論文の構成は次の通りである。2 節では，VPC と CMC の幼児期の発話状況について，CHILDES を基に調査した結果を示す. 3 節では，VPC と CMC は焦点化の点で違いが見られることを提示し, さらに, 子どもがこの二つの構文をどのように選択しているのかを考察する．4 節は纏めである。

2. VPC と CMC の幼児期の発話状況

子どもの発話データベース CHILDES における女児 Lara（1 歳 9 ヶ月から 3 歳 3 ヶ月までの記録）の発話を観察すると，2 歳頃から文法的な誤り（例えば，複数形が単数形で話されている，主語が言語化されていない，動詞に三単現の s が付いていないなど）は見られるも

のの，(5)と(6)に示すような VPC と CMC の原型としての発話が確認できる．

(5) VPC
- a. hafta put shoe on. (2 歳 1 ヶ月)
- b. put glasses on. (2 歳 1 ヶ月)
- c. put his trousers on. (2 歳 1 ヶ月)
- d. take bib off. (2 歳 1 ヶ月)
- e. can I take this ribbon off? (2 歳 6 ヶ月)
- f. can you put my socks on? (2 歳 8 ヶ月)
- g. I go and take my socks off. (2 歳 8 ヶ月)
- h. she wants to take the hat off. (2 歳 10 ヶ月)

(6) CMC
- a. put it in the kitchen. (2 歳 1 ヶ月)
- b. put it on the little chair. (2 歳 2 ヶ月)
- c. mummy put your feet on the pedals. (2 歳 2 ヶ月)
- d. don't put feet on the table. (2 歳 2 ヶ月)
- e. put that (caterpillar) in her hand. (2 歳 6 ヶ月)
- f. I put some glue on it. (2 歳 7 ヶ月)
- g. I will put this on the sofa. (2 歳 11 ヶ月)
- h. I [//] you 0are [*] taking the things off me. (3 歳 3 ヶ月)

ここから分かるように，位置変化の中でも，身に着けるモノと身体部位が関わる場合には CMC ではなく VPC が選択される．(7)に見るように，身体部位を言語化すると，構文として成立しなくなる．(ここでの*マークは，my feet を付けると非文法的になることを示す).

(7) put my socks on *(my feet).

なぜ身に着けるモノと身体部位が関わる位置変化を表す場合，CMC ではなく VPC が選択されるのだろうか．

3. VPC と CMC の特性と経験的基盤

先にも述べたように，CMC も VPC と同様に，基本的に因果関係を示す構文であり，構文文法における CMC の意味表示の中にも使役(cause)が含まれている．

(8) X causes Y to move $Z_{path/loc}$

（Goldberg, 2006: 73）

このように，CMC も位置変化を記号化する構文であるにも関わらず，身に着けるモノと身体部位が関わる位置変化の場合には CMC は選択されない．

CMC と VPC の構文特性についてさらに調べていくと，焦点の位置に違いがあることが確かめられる．焦点とは，聞き手にとって新しい情報となる部分のことである．両構文の焦点の位置を見てみると，VPC の[Subj V Obj P]では，目的語の結果に焦点が置かれており (Gries (1999),(2002))，一方，CMC は，概して，着点項に焦点があり，移動物には焦点が置かれない (Goldberg (1995))．この点は情報構造の観点からも同様の説明ができる (Lambrecht (1994))．情報構造には旧情報と新情報の二種類があり，構文の形式において，一般的に文末には新情報が配置され，そこが焦点化される．

それではなぜ，子どもは位置変化の中でも身に着けるモノと身体部位が関わる場合に，PP に焦点を置く CMC を選択しないのだろうか．太字は焦点化の要素を示す．

(9) [NP V NP **PP]**

仮に，CMC でそのような位置変化を表すとすれば，PP の位置には身体部位が生じることになるが，その場合，文法構文として成立しない．(10a)は Lara の発話であるが，(10b)のように帽子をのせる頭の部分を言語化することはできない．

(10) a. and I'll put your hat on. (Lara, 2 歳 10 ヶ月)
b. * and I'll put your hat on my head.

なぜ，身に着けるモノの位置変化において身体部位は焦点化されないのだろうか．用法基盤理論に基づけば，子どもは経験を重ねながら，事象に見合う構文を獲得していく．身に着けるモノの位置変化については，例えば，眼鏡なら目に着ける，帽子なら頭に被る，靴なら足に履くというように，身に着けるモノとその場所の位置は定まっている．他にも靴下やズボンなど衣類を身に着ける動作を表す表現は，乳幼児の頃から親や周りの世話をしてくれる大人との会話の中で頻繁に使用され，子どもは，視覚的にも聴覚的にも，その対応関係に関する情報を得ている．実際，女児 Lara の両親や祖父

の発話のなかにも，身に着けるモノの位置変化に関する発話場面があり，その中で，身に着けるモノが身体のどの場所と関係しているのか認識されていく．尚，MOT は Mother，GRD は Grandfather，DAD は Father を示す．

(11) a. MOT: you've gotta put that bib on, Lara_R. (Lara, 2 歳 1 ヶ月)
b. MOT: do you wanna put your slippers on? (Lara, 2 歳 4 ヶ月)
c. MOT: why do you always hafta take your socks off, child? (Lara, 2 歳 6 ヶ月)
d. MOT: you can put your proper shoes on when we go out. (Lara, 2 歳 8 ヶ月)
e. GRD: I'll take my hat off. (Lara, 2 歳 10 ヶ月)
f. DAD: put your underpants on before your trousers. (Lara, 2 歳 11 ヶ月)

また，視覚的，聴覚的な情報以外にも，自らの身体を通しての経験からも，身に着けるモノと，それを身に着ける場所の対応関係を習得していく．例えば，子どもは自分で衣類の着脱ができるようになると，例えば，靴なら初期の頃は左右対称に履いたり，履き違えたまま歩いていたりすることもあるが，日常生活において靴を手に着けたり，頭に被ったりすることはない．つまり，身に着けるモノとその場所を理解している．そのため，身に着けるモノの位置変化において身に着ける場所は焦点化されず，結果として CMC は選択されない．焦点化されるのは，身に着けるモノがどうなったのかという着脱であるため，VPC が選択される．

Lara の発話のなかに，(12)に見るような身体部位が CMC の PP の位置に生じているものがあり，一見するとこれまで述べてきたこととは相反するようにみえる．

(12) put it on my hand. (Lara, 3 歳 0 ヶ月)

この場合，身体部位 my hand が言語化されているが，ここでは，it は身に着けるモノではなく，Lara が魚釣りゲームの中で釣り上げた魚を指している．このように日常的に手に着けるモノでない場合には，身体部位が焦点化され CMC が選択される．一方，同時期の Lara の発話において，手に着けるモノとして一般的に認識される手袋の場合には，手は焦点化されず，(13)に見るように，Lara は VPC を選択している．

(13) why haven't you got that glove on? (Lara, 3 歳 0 ヶ月)

尚，この点については，日本語を母語とする子どもにも共通して見られる．身に着けるモノの着脱を述べる発話において，身に着ける場所を表す身体部位は言語化されていない．

(14) a. kukuta@u[:kutsushita] haku. (Ayumi, 2 歳 5 ヶ月)
b. kutsu hakasete, kutsu nugasete. (Asami, 3 歳 0 ヶ月)

以上のことから，身に着けるモノと身体部位が関わる位置変化においては，身体部位は焦点化されず，着脱に焦点を置く VPC が選択される．

4. おわりに

本論文では，形式的・意味的に類似している英語の CMC と VPC が言語獲得初期段階である幼児においても区別して使用されていることを，CHILDES における女児 Lara の発話記録をもとに示してきた．CMC と VPC はともに位置変化を表すことができるが，身に着けるモノと身体部位が関わる位置の変化を言語化するときには、起点あるいは着点となる身体部位を言語化した CMC ではなく，着脱を表す VPC が選択される．この点について，認知言語学，構文文法論の観点から，焦点化と経験的基盤が関係していることを示してきた．身に着けるモノと身体部位が関わる位置変化において，我々は日常的な経験を通して身に着けるモノとそれが身に着けられる場所を認識している．子どもが，CMC と VPC を選択，使用することができるのは，視覚的，聴覚的な情報を含めた自らの経験に基づく身体を通した思考ができているからである．

謝辞

本論文の執筆にあたりまして，査読委員の先生方に大変貴重な御意見を賜りましたこと心より感謝申し上げます．本研究は JSPS 科研費 18K00668 の助成を受けたものです．

参考文献

[1]Goldberg Adele E, (1995) Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure, Chicago, University of Chicago Press.

[2]Goldberg, Adele E., (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford, Oxford University Press.

[3]Goldberg, Adele E. (2016) Tuning in to the Verb-Particle Construction in English, Léa Nash and Pollet Samvelian (eds.), Approaches to Complex Predicates, Brill, Leiden.

[4]Gries, Stefan Th. (1999) "Particle Movement: A Cognitive and Functional Approach", Cognitive Linguistics 10-2, 105-145.

[5]Gries, Stefan Th. (2002) "The Influence of Processing on Syntactic Variation: Particle Placement in English", Verb Particle Explorations, ed. By Nicole Dehe, 269-288, Mouton de Gruyter, Berlin.

[6]Lambrecht, Knud. (1994) Information Structure and Sentence Form, Cambridge, Cambridge University Press.

[7]MacWhinney, B. (2000) The CHILDES Project: Tools for analyzing talk. 3rd ed. Vol.2. The Database, Mahwah, N.J.: LEA.